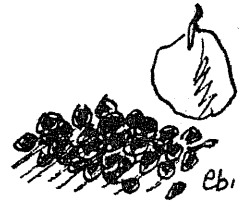

年頭の祈り
『すべての幼児』のために

倉橋惣三

われらの関心は、『すべての幼児』にある。一々、すべてのとことわらなくともいゝことであるが、児童憲章に、遂条すべての児童とことわつてあるのと同じく、すべてということに重点をおくのである。

個々の施設なり、実際の方法なりについては、素よりそれぞれ別の分担によつて専念するところがある。又、直接の留意と責任には区別がある。しかし、関心においては、一つであり、普通であり、すべての幼児に亘つて偏執しない。寧ろ一つに忠実なるものこそ他の忠実を尊重し、自ら直接に当らなくとも、他に対する理解と支援とを惜まない。少くも已れの分担を主として、他を侵すことをしない。況んや、排し斥け妨げるようのことをしない。それどころか、関心はもちながらも事に当り得ないでいる面を、進んで担当していてくれる同憂の人に感謝しないでいられないのである。

すべての幼児は種々である。それぞれの要求に従つて種々の適切を期するのは、真にすべてに適切であり得んがためである。素より分立のための分立でもなければ、況んや対立のための対立ではない。

殊に、『すべて』の検討が詳かになり、それぞれの面に対する徹底が周到になるに従つて、『すべて』の分化も小わけになり、その各々の分担も適確になり、よつて以て、真にすべてが『すべて』として完うせられる。この意味において、分化は進歩の基であり、又、進歩の結果でもある。たゞ分化分担に囚われて、『すべて』を忘れるとき、狭隘となり、偏跛となり、偏僻の心ともなる。

事に当つては熱心を貫しとする。しかも、所謂熱心は、我

執の別名であることがある。熱心と我執は似て異る。熱心は事への態度であり、我執は我への態度であるからである。熱心は他の熱心を認容するが、我執は他の熱心を容れない。従つて争う。争いは対他の心である。争心は屢々わが真の熱心を失い、又『すべて』を忘れ去らせ、貫しとしない所以である。

『すべての幼児』への関心が、分化して各々の熱心となることは喜ばしい。かくして『すべて』の熟れのに面もゆきわたりつゝ合して『すべて』を完うし得るからである。しかも分化が相争うとき、『すべて』の関心は悲しむ。他の熱心を尊敬しつゝ、他の分担を感謝しつゝ、敢えて力を籍し得ないまでも、『すべて』において相和する途はないものか。同業(『すべて』の中の分担者)相競いつゝも、『すべて』において相和する途はないものか。

聖太子徳憲法には、『和を以て貴しとなす』とある。基督の山上の垂訓には、『和平も求むるものは福なり』とある。こゝで筆者の言つている和は、それらの聖者の用語に倣つているものではない。それらの貴い用語は、人の世の和のむつかしさを含み、聖者にして初めていえる訓えである。こゝで筆者の言つているのは、そんなむづかしさを意味するものでもなく、そんな神聖な訓えでもない。われらの目の前に居る幼児達から常に学ぶものである。

わが国の国立幼稚園の園児数一一四、九六五、私立幼稚園の園児数一一二・七九六、公立保育所の園児数五〇・二〇三私立保育所の園児数一六五、七一七の数字を見れば、わが国の『すべての幼児』のためを希うものとして、未だ甚だ遠い言いかえれば、国公立幼稚園、私立幼稚園、公立保育所、私立保育所は、相協力して、われらのすべて関心を満たすべき急務に迫られている。寸刻も相対立しあう遑はないのである。わが国の幼児保育の施設的発展といえば、国立公立私立の幼稚園保育所の増設と充実とのほかはないが。又或は互の研鑽において、相批判しあい、相助言しあうのも必要なことであろうが、しかも、それは、常に好意と敬意とを以て互を認識しあつた上でのことでなければならない。苟も一つが他の発達の妨げをなすようなことであつてはならない。

更に、この各々の面において、『すべての幼児』のために現在力を尽している。幼稚園保育所の教職員数の総数は僅に一五・五七九の少数である。此の少数の同志こそ、わが国の『すべての幼児』のためを現在身を以て行つている同業である。これが和を以て相結ぶことなしに、いつの日か、『すべての幼児』のための祈願を実施し得ようや。

言またしても理となり論となるの傾きがあつたが、われらの『すべての幼児』そのものに就て思いをいたすとき、幼稚園保育所にある四十五万の幼児らは、皆和の権化である。その一つ一つの和の顔と、和の集いとが目の前に見える。